

胎児の世界―受胎から誕生まで―

後藤 芳博 著

(生物の進化と胎児の成長・誕生)

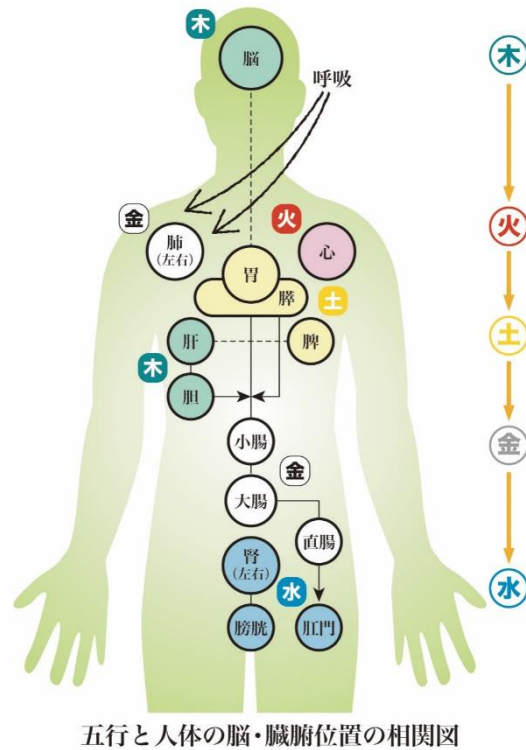
宇宙はおよそ一五〇億年前のビッグバンで生まれ、地球はおよそ四五億年前に産まれたといえます。そして生物はおよそ三八億年前に誕生し、人類はおよそ五〇〇万年前に誕生したようです。その三七億九五〇〇万年の間に海中から上陸し、爬虫類などを経て哺乳類へと進化します。この四〇億年近くの間の進化を赤ちゃんはわずか四〇日で成し遂げます。ごく単純に考えると、一日が一億年分に相当するようです。生物は海によって進化しましたが、赤ちゃんは羊水に浸って進化します。しかも羊水の成分は海水に近いのですから、いっそう不思議な話です。赤ちゃんは生物(赤ちゃんも生物ですが…)を比較したとき、胎盤が地盤(海底)、羊水が海水となるでしょうか。そしてヒトとなった赤ちゃんは、一気に大気中へ上陸するのです。地球上のこの大気中に出てきて肺呼吸を始めた時(生年月日時)から太陽・地球のエネルギーが付与された生命体となります。

(1) 現代医学が明らかにした受精・胎児の身体の形成

胎児の身体は、現代の生命科学が明らかにしている如く、上体から下体に向け、木火土金水の五行の順番に形成されます。正常な自然分娩であれば、人間は頭(五行では木)から生まれます(逆子で生まれる比率:三・五%)。後掲する「引用参考文献」の『こうして生まれる―受胎から誕生まで』には、精子卵子の二つの細胞が融合する瞬間から、受精卵が細胞分裂を繰返しながら羊水の中で胎児が成長し続け、月満ちて誕生するまでのプロセスを美しいカラー画像によって再現しています。その画像は最新の医療用撮影技術(Ⅱ三次元コンピュータグラフィックス)を使用しているため、胎児の身体が形成され成長していく有り様・プロセスを明確に視認することができます。その胎児の身体の形成・成長のプロセスを取りまとめれば、次の如くであります。

- ① 木：神経系の形成開始……………妊娠十八日目
目の発生が始まる……………妊娠二十一日目頃
- ② 火：胎芽の心臓・循環器系の発達開始……………胎生三週間目
心臓、脳が形成され、大きくなる……………胎生三十二日目
- ③ 土金：消化器系としての肝臓、胃、食道が形成され始める……………三十六日目
(循環器、脳の上半身に比べ、下半身の機能の発達は遅れる)
顔の造作(鼻腔、顎、唇、歯の発生)が急にでき始める……………四十日目
○手の形がはっきりする。脳に成長ホルモンを出す腺が発生……………胎生四十二日目
- ④ 水：血流は母体から受け取った栄養を胎芽に届ける。この栄養供給に反応し胎児の腎臓は初めて尿を作出す(腎臓は子宮内で完全に形成されるが、機能し始めるのは出産後)……………胎生四十四日目
- ⑤ 金：身体上下部……………上下肢が急速に発達。上肢が下肢より数日早く発達する。数日立つと肩、腕、脚、顎の軟骨が骨に換り始める。体格が形成される……………五

⑥水・受精後五週目まで、遺伝的に性別は決っているものの、男女子生殖器はまったく同じ。生殖器の分化が始まる。……受胎三ヶ月目



- ⑦手足の指先に指紋が現れる。……満四ヶ月
- ⑧身体の成長はスローダウンし、脳が急速な成長を続けている。……満八ヶ月
- ⑨出産準備完了。……満九ヶ月

現代の生命科学・医療技術などが明らかにしているのは、大自然の営み・季節の循環（＝木火土金水の陰陽五行の循環）に随って胎児の身体が形成され成長していくことです。また、生を得た人間が減る際には、同じく脳の木（脳死）、火の心臓停止、次いで土の消化器系・金の肺呼吸器系の停止、最後に水の腎系の生理機能の停止（毛髪＝水は、生体細胞の機能が停止しない限り、心肺停止後も伸び続ける）と続くのです。この人体五行の生理機能の発達・成長と停止は、大自然の営み（大自然の摂理）に順じて機能し動作しています。『人体という小宇宙―意識の成長プログラム―』にも「人体システムは、自然界と一体調和して高度に完成したシステムであり、小宇宙といわれています。制御中枢の脳と連携し、自立した機能を持つ五臓六腑に、全体システムをみることでできます。」と明快に説かれています。近現代の生命形態学や生理学などの生命科学の研究・進歩発達によって裏付けられる遙か以前に、陰陽五行を基礎とする東洋医学（中医学）・蔵象学などに説かれているのは大きな驚きであります。

(2) 誕生と産声

子宮内では呼吸するための酸素も、消化する食物も、除去する老廃物もない。この世に誕生することによって肺、胃腸、腎臓などが機能し始める。心臓に母体から入っていた血液は突然これまでの経路を変えて肺に送られなくてはならない。それまで、心臓上部の二つの部屋の孔に間に開いていた孔は即座に閉じられる。神経、脳、心臓など胎内で機能していた器官も外界に対応する。

臍帯が切断されると、胎児への酸素供給はいきなり止まる。血液は引き続き赤ちゃんの体内を駆け巡っていますから、二酸化炭素が血中に蓄積すると脳幹の呼吸調節中枢が横隔膜の筋肉と胸部に指令を出し、数ヶ月前に初めてリハーサルした規則正しい呼吸運動が開始させる。筋肉が収縮し、胸部が拡大し、横隔膜が下に下がる。と、風をはらむヨットの帆のように、肺に空気を引き込む空間が出来る。この最初の深呼吸―空気を吸い込んだ後、赤ちゃんは元気に息を吐き出す―が、産声です。この行動ほど、赤ちゃんが子宮の外の世界に順応したことをはつきりと示す行動はありません。(出典：『こうして生まれる―受胎から誕生まで』(アレクザンダー・シアラス著 医学博士 中林正男監修 ソニー・マガジズ)

(3) 新生児の胎内記憶

この二十年余りの間に、精神科学、発達心理学、乳児心理学、行動小児科学といった分野で、過去の常識を覆す新しい発見が続いていることです。現在の最新医学科学によって時代に、次のことが次第に明らかになって来ています。すなわち、『胎内記憶 命の起源にトラウマが潜んでいる』(池田明著 角川新書)によれば、胎児、乳幼児は、「陣痛が始まってから誕生直後までの誕生記憶」「新生児から乳幼児にかけての新生児・乳児期にかけての記憶」などを持って誕生し成長していくと言われています。これには、当然、母親、両親の愛情、生き様が深く関わり、昔から言われてきた胎教、乳教などの重要性が再確認されます。

(4) 新生児の脳と欲求

欲求は、人間が生き続けるためには必要不可欠な原動力であり、欲のない生はあり得ない。米国の心理学者アブラハム・マズロー氏(一九〇四年四月―一九七〇年六月)は、人間の欲求に次のように五段階の階層的構造があるとしています。

- 第一：食欲、性欲などの生きるための生理的欲求
- 第二：安全性、安定性への欲求
- 第三：愛情と帰属の相互信頼の欲求
- 第四：自尊心と他から尊敬されたい欲求
- 第五：自己実現の欲求

この階層的欲求は、人間の脳が発達してきた次の三層の脳からなる知的システムの発達とも対応しています。

- (a) 爬虫類型の脳……心臓の鼓動、血液循環、生殖本能、原始的感觉や運動、反応、衝動など生命を維持するための脳
- (b) 原始哺乳類型の脳……喜怒哀楽の感情を生み出す脳
- (c) 新哺乳類型の脳……人間だけの理性や精神を司り、人間を人間にしている脳

新生児(乳児)の脳ははじめ同調して機能する爬虫類型と原始哺乳類型の二種類の脳を持ち、新哺乳類型の脳は白紙の状態で生まれて来ます。脳の発達にとって重要な乳児期四年間に白紙状態にある新哺乳類型の脳の左右両半球を結ぶ脳梁が完成するのです。脳の右半球(右脳)は、原始哺乳類型の脳からのナマの情報を胎児期

から継続的に蓄積され、ここで蓄積された情報がさらに抽象的思考の始まる七才以降の知的発達の土台となります。一方、左半球(左脳)は、右脳に比べて、原始哺乳類型の脳との連絡が希薄で、間接的に原始哺乳類型脳と関係を持ちます。七才以降の児童期になると、意識は新哺乳類型脳に移行し、自分というものがなかったものが、自己が純粹な内的主体となり始め、本当の自分が出現し始める。

備考…『八字命理学新解卷四 事象論(2)』から抜粋引用。